

## スペインの庭(4)<sup>1</sup>

鳥 居 徳 敏

### 7.6 旧王宮『コマーレス宮』と『ライオン宮』、ユスフ1世(1333-54)、およびムハンマド5世(1354-59, 1362-91)

アルハンブラの旧王宮とは、イスラム時代の最後の王宮を指し、16世紀に着工されたルネサンスのカルロス5世宮により一部取り壊されたものの、14世紀というイスラム世界では極めて希有な中世の遺構として、世界的にも重要な位置を占めている。旧王宮とはカルロス5世宮の新王宮に対する名称である。このイスラム王宮は5つのパティオをコアとして構成される。西側から『入口のパティ』(図1-1)、『マチューカのパティオ』(同図-2)、『黄金の間のパティオ』(同図-4)、『コマーレスのパティオ』(同図-5)、および『ライオンのパティオ』(同図-7)と呼ばれ、最初の2パティオは廃墟と化し、残る3パティオが現存する。第2パティオの名称はカルロス5世宮の建築家ペドロ・マチューカ Pedro Machuca (1490頃-1550)に由来し、この場所に同建築家の仕事場があったとされている。このマチューカの遺したアルハンブラ最古の平面図(1527-42、図2)には計画されたカルロス5世宮の他、増改築後の要塞部と旧王宮部が描かれている<sup>2</sup>。

このマチューカ図面から推測できることは、『入口』と『マチューカ』のパティオが既に廃墟に化していたであろうこと、そしてメクスアール(行政部)と『ライオンのパティオ』北側の増改築がなされていたであろうことである。前者に関しては、15世紀から16世紀にアルハンブラを訪れた旅行者等の記述でも何ら語られていない。現在の定説では、これら2パティオは王宮の裏方、すなわち衛兵や事務方の行政関係の諸施設があったであろうと推測されている。それらの配置構成は前項の離宮『ヘネラリーフェ』に付属する王宮からの入口部に見られる2パティオの構成にも類似する。こうしたことから、極めて機能的なパティオであったであろうことが推測される。これらに比べ、現存する3パティオはパティオ空間の至宝と評価できるものであり、その緊張した抽象的・詩的構成は計算し尽くされた旋律を奏で、訪問者を震撼せずにはおかまいであろう。

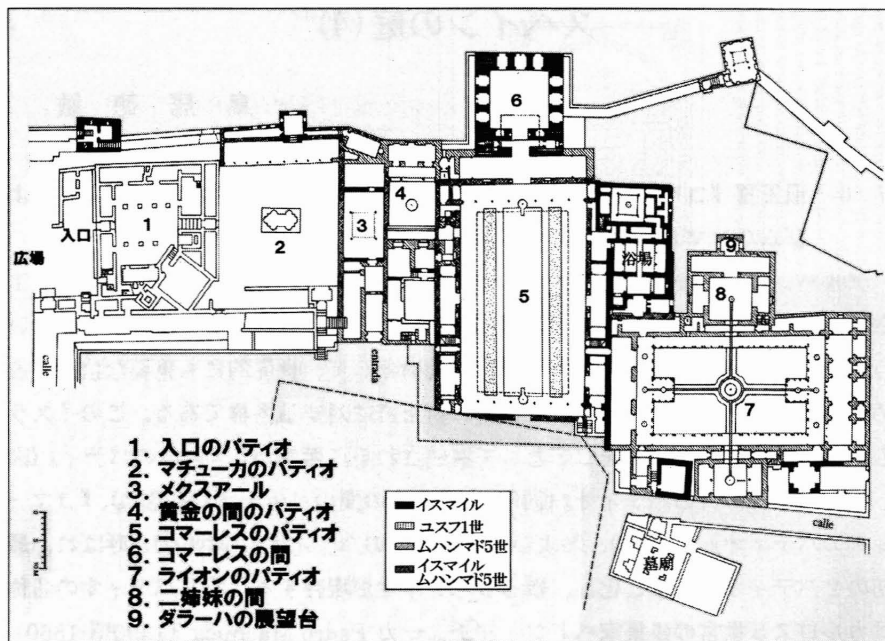


図1 アルハンブラ、古王宮平面図 (Fernández-Puertas)

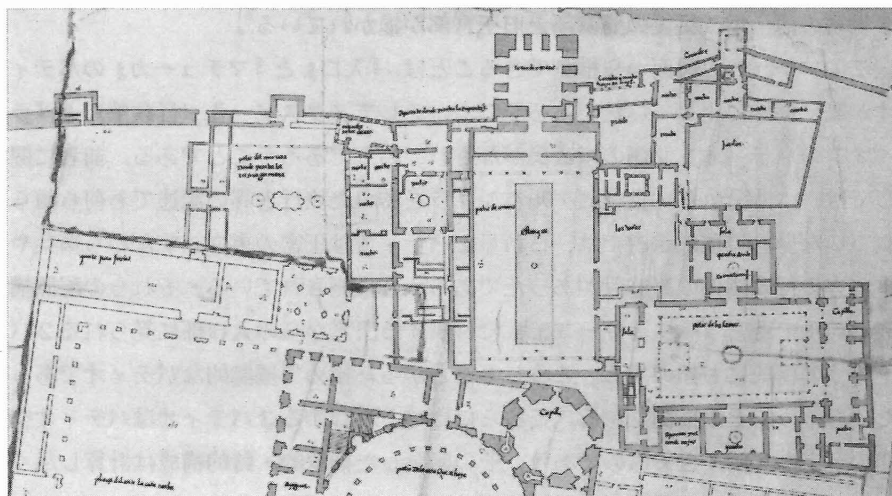


図2 同上、マチューカによる平面図 (Biblioteca Real)

現在の定説では、古王宮は2つの王宮で構成され、一つはコマーレスのパティオを中心とした『コマーレス宮』、もう一つはライオンのパティオを中心とした『ライオン宮』と言われる。また建設した王の名前から、前者を『ユスフ1世宮』、後者を『ムハンマド5世宮』とも呼ぶ。

### 『黄金の間のパティオ』

『黄金の間のパティオ』は約9×11mのすべて白大理石床の小空間であり、数段掘り下げられた1辺約9mの正方形床面のその中央をさらに8角形に掘り下げ排水用とし、その8角形掘り下げ部に接するかのように円形花卉状の水盤が床面すれすれに置かれている。その中心の噴水口から湧き出た水は、水盤を満たし、そこから溢れ、8角形の窪みに落ちて排水される。パティオの東西面は開口部のない白壁、北面は3連アーチの柱廊であり、その背後に16世紀初めに改造された『黄金の間』が続く。南面は『コマーレス宮』ファサード（正面、図3）であり、これは1369年のアルヘシラスの戦いで、ムハンマド5世の勝利を記念するものであった。この正面の床面から軒までの高さが約11.2m、反対側の軒高約10.8m、そして側壁の軒高が約9.5mあり、大げさに言えば、井戸の底に入ったような穴倉のような空間であり、普通だったら、暗いじめじめした感じが漂うことであろう<sup>3</sup>。しかし、白大理石の床、白壁、そして徹底的に装飾されたファサードとその突出した軒により、厳かな空間に転じ、水盤から落ちる水の音に静けさのみが強調される。糸を張り詰めたような静けさであり、その静寂にわずかな水の音が奏



図3 アルハンブラ、黄金の間のパティオ、コマーレス宮正面

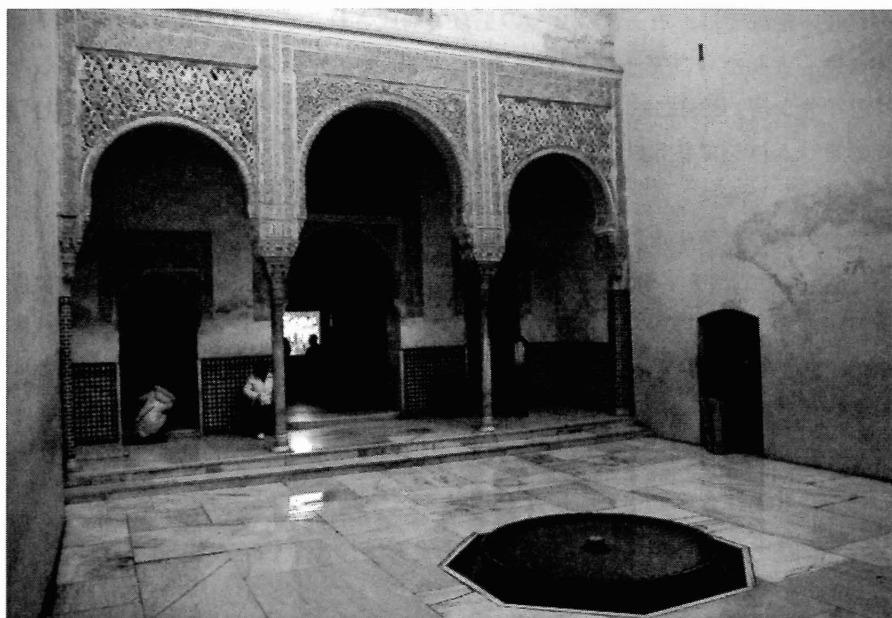


図4 アルハンブラ、黄金の間のパティオ、『黄金の間』前廊

でられている。

現在ではこのように見事な小空間と評価できるものの、このパティオが最初からの計画であったかどうかについては疑問が残る。まず、黄金の間が16世紀のキリスト教徒による改造であり、それ以前の状況が不明であること。同間前廊の3連アーチの柱頭が13世紀のグラナダ芸術初期に属しながらも、その柱頭が支える上部構造のアーチや壁面装飾は次世紀のものであること(図4)。コマーレス宮正面ファサードもまた14世紀後半のグラナダ芸術最盛期に属すること。そして、最大の疑問が、これほど立派なファサードを穴倉のような場所に設けていることである。それ故、19世紀後半の修復担当建築家コントレーラスなどは、コマーレス宮正面は現在のような閉じたパティオではなく、北側に開放された小広場であったかのようにも記述している。すなわち、黄金の間が存在しなかったという推測になる<sup>4</sup>。しかし、その小広場が存在したとして、この小広場にどのような経路を通して人々が達することができたのかが問題となる。いずれにしても、問題は容易には解決されない。



### 『コマーレスのパティオ』

次の『コマーレスのパティオ』も同じく白大理石床の清楚な空間であるが、約 $36.60 \times 23.40\text{m}$ と巨大であり、細長の大きな池（推定約 $34.5 \times 7.2 \times$ 深さ $1.4\text{m}$ ）がその中央を占める<sup>5</sup>。そして、池の長辺両側に沿ってはアラヤーネス（銀梅花）の長い生垣を配す。そのため、『池のパティオ』とも、『アラヤーネスのパティオ』とも呼ばれてきた。南北の短辺には7連アーチの柱廊があり、北側にコマーレスの塔。その内部は1辺 $11.30\text{m}$ の正方形平面、天井頂部までの高さが $18.22\text{m}$ と、宮殿最



図5 アルハンブラ、コマーレスのパティオ、南面側（北塔屋上から撮影）



図6 アルハンブラ、コマーレスのパティオ、北面側

大のクッパである謁見ホールである。南側は上階にも7連アーチが架けられ、上下アーケード間の中2階にも同数の開口部が設置される。南側本体の建物はルネサンス王宮の建設で取り壊され、この棟の北側壁体のみが現存する。東西の長辺には2階建ての棟家が配され、その白壁に最小限の開口部が設けられている。この軒先端の高さ約7mで南北アーケードも含め、軒の高さが統一される。南面は1階アーケードと同面の中2階と2階アーケードが乗り、後者の軒先端までは15mの高さを持つ。北面は、アルハンブラ最大の塔で、謁見の間の入るコマーレスの塔が1階アーケードから後退し、21mの高さに聳える。

池の南北の短辺中央に噴水があり、この噴水から水が注がれる。かつては池の中央にも噴水が存在した。少なくとも1526年に訪問したナヴァジェロの記述によれば、池の中に噴水があった。同記述によれば、現在はきれいに刈り込まれた銀梅花の垣根になっているが、当時は銀梅花の他、数本のオレンジの樹も植栽されていた<sup>6</sup>。また、19世紀に出版された図版にはよく茂った樹木が見られるものもある(図7)。ただし、19世紀前半はアルハンブラの修復作業が始まっておらず、庭園の手入れは行き届く

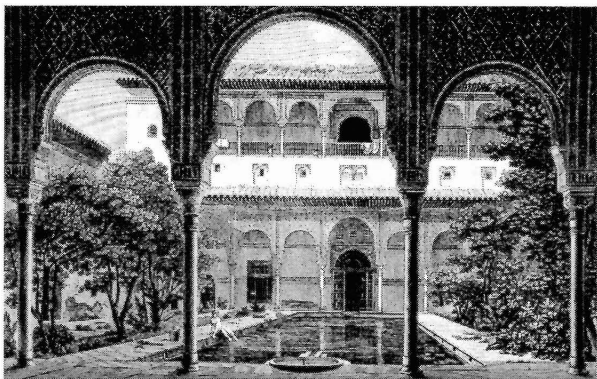


図7 コマーレスのパティオ、19世紀前半の図版

(Vauzelle)

ことなく、樹木はよく生長していたことであろうと推測される。

幾何学的に刈り込まれた生垣は、イスラム装飾の幾何学化された植物文や幾何学文と共通した特徴であり、特にこのパティオにはふさわしく思われる。この幾何学的抽象空間のパティオは今日の訪問者を驚かさずにはおかない。ここに初めて入る観光客たちは、国の内外を問わず、必ず驚嘆の叫びを発するのである。

まずプロポーションがよい。それは単に平面的なプロポーションを指すのではない。敢えて言えば、空間的なプロポーションが絶妙である、としか言いようがない。平面規模に対する東西棟屋の高さ。この高さがいかにもバランスよく、空

間を閉じていながらも大空に開放する。南棟の2層半の高さは完全に空間を閉じ、衝立の役目を果たす。そして北棟は前廊アーケードで空間を閉じながらも、空に開放し、しかもその解放された空をコマーレスの塔が閉じる。閉じるが後退している分、視界が開け、閉鎖されることはない。次に、池のバランスもよい。静かに張りつめた水面。両端の噴水から池に水が注がれ、その波紋が緩やかに広がっていく。水の落ちる小さな音色と波紋の動き。その水面はコマーレスの塔を映し込んだり、南棟のファサードを映す鏡となったりして、空間の二重奏を演じる。そして、池の両側を縁取る常緑の生垣。銀梅花のこの生垣は空間に彩りを添えると同時に、空間を仕切り、池への接近を禁止するようであり、またそれにより、池すなわち水を神聖化する。さらに、床の白大理石と東西棟屋の白壁が清涼感と抽象感を与えるとすれば、南北のアーケードの繊細な石膏装飾は暖かさと色合いを添える。

一般の観光客は地上の1階を訪問することしかできない。上階に上れるのは研究者の特権である。コマーレスの塔の南側壁体は6層になっており、7層目が屋上で、5層目は西側の階段、中央の小ホール、そして東側の部屋で構成される。この中央ホールの南側中央に2連アーチの唯一の開口部が床すれすれの位置に設けられており、日本と同じく床に座してパティオの眺望を楽しむことができる。この絶景を眺めることができることが正に特権であろう。王の居住空間に想定されて然るべきものと推測される。

同様の特権が南棟にも想定できる。中2階の天井高は僅か2.25m

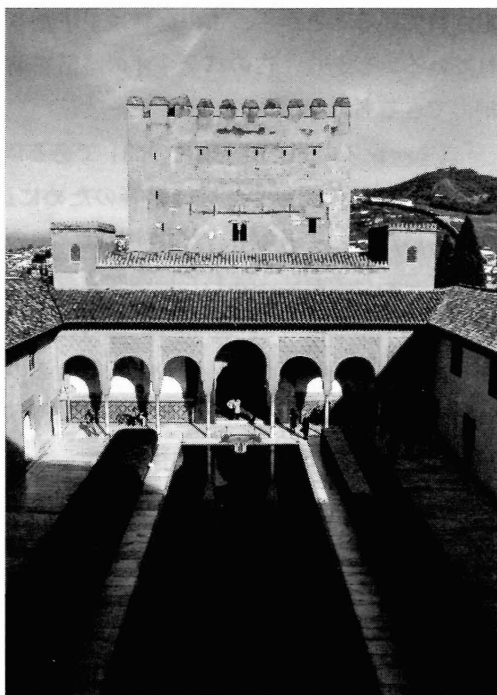


図8 コマーレスのパティオ、南棟上階からの眺望

程度。西欧の建築では余りにも低い。しかし、前記したように、イスラムの生活は日本と同じく座式の生活様式であり、身長も日本人とそう変わらないことを考慮に入れるなら、首をかしげるほどの低さではない。この空間は恐らく座してパティオを眺めるだけの機能を持ったことであろうから、適切な高さとも言えよう。そして、この高さからの眺めは、低空飛行する鳥のように、現実界では想像できない風景を觀賞でき、それは今でなら低空飛行のハイビジョン映像で見られる光景に類似する。上階の2階アーケード床の高さは約10.5m。この高さは上述したコマーレスの塔の5層目中央ホールの床高約11.5mと僅か1m程度の差である<sup>7</sup>。後者からの眺望がその前の屋根で足元が削られるのに対し、この南棟の上階からは足下を含め全景を享受できる(図8)。この高さからのパティオは天にも昇るような気持がするであろうし、大げさに言えば、この世のものとは思えない絶景を提供する。この特権を誰が享受するのか。パティオの東西棟が4王妃の住宅に想定されていることから、この南棟は王子たちの居住兼教育施設と一般には考えられている。しかし、このパティオの眺望を前にしては、子供たち用であることに納得できるものでない。

『コマーレスの間』が「謁見の間」である以上、このパティオは公式行事、あるいは国外からの親善や休戦締結等のために送られる使節団を受け入れる空間になっていたことであろう。だとすれば、国の威信をかけた豪華さを誇示する必要があり、またそれにふさわしい空間施設がこのパティオに違いないのである。そこに到達するための玄関として、恐らく南棟は必要であっただろうし、時にはそうした使節団を驚かせる展望台として、この2階ギャラリーが存在したのではないかと推測される。2階からの眺望は正にそうした結論に導くのである。

既に見てきたように、池を中央に配した空間構成はナサリ朝グランダ王国では伝統的なパティオ構成の一つであり、パティオの雛型と言っても過言ではない。しかしながら、このパティオも最初からこのように計画されていたかはすこぶる疑問である。

コマーレスの塔の場所には、元タイスマイル1世(1314-25)の小規模な宮殿が存在した。さらに、パボン・マルドナードは同じ場所にムハンマド3世による塔が存在したとも推定する<sup>8</sup>。この塔は城壁に付随し、構造的にも軍事的にも城壁を補強する塔である。既に見たように、こうした塔はパルタール下宮やベルセ

ラーヘ宮に存在するクッバ=塔と同じであり、その城内側にはパティオや庭園が設けられている。いずれにしても既存の塔（クッバ）を取り壊し、現コマーレスの塔を新築したのがイスマイル1世の息子ユスフ1世であった。規模は巨大化したものの、これもクッバ=塔である。その前面に今日の池やパティオがあったかどうかは判明していない。壁面装飾に施された銘によれば、北側の本塔前の前廊、及び南棟の前廊はイスマイル1世の孫、すなわちユスフ1世の息子ムハンマド5世によって作られ、さらには装飾の特徴からコマーレスの間と前廊の間に挿入されたホール『船（底）の間』も後者の作品と推定される<sup>9</sup>。こうした装飾が建築本体と同時期の作品であるならば、現コマーレスのパティオはムハンマド5世に負うことになる。そうではなく、装飾のみが改修されたとなれば、ユスフ1世の手になることになる。残念ながら、こうした疑問点を解消するような資料に不足しているのである。

### 『ライオンのパティオ』

ライオンのパティオを中心とした『ライオン宮』はムハンマド5世による建設であり、一般には王位に返咲いた1362年に着工され、1370年までには完成していたとされる。事実、時の大臣イブン・アル・ジャティブはこの王が国防や国家財政のことを忘れ、造営に明け暮れていることを嘆いており、1362年暮の建設状況は同王が1371年までに造営した宮殿の半分にも至っていないと記す<sup>10</sup>。

ライオンのパティオの平面規模は28.50×15.70m。四周に回廊が走り、その軒高は約6m。中央に12体のライオン像に支えられた噴水があり、このパティオの名称となる。この噴水は

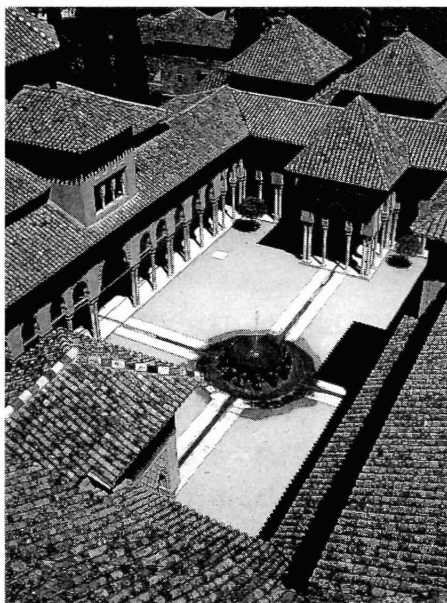


図9 アルハンブラ、ライオンのパティオ、鳥瞰

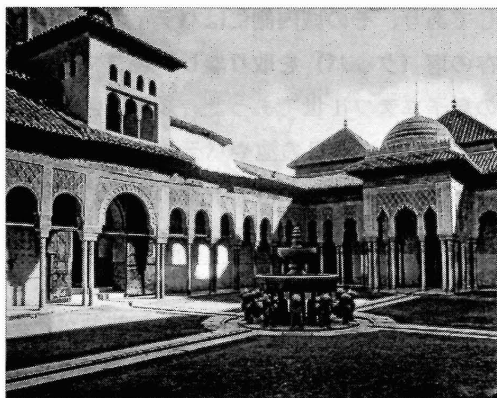


図10 ライオンのパティオ、ロラン写真  
(Instituto del Patrimonio Histórico  
Español)



図11 同上、ロラン写真 (IPHE)

水盤中央の噴水口のみならず、12頭のライオンの口も噴水口となり、水盤からこぼれ落ちる水がライオンの体を濡らすと同時に、ライオンの口から水がはかれる。東西短辺の中央に突出する泉殿にも噴水があり、これは同辺回廊中央の噴水と小水路で連結され、この小水路が伸びてパティオ中心の噴水に達する。同様に、南北長辺中央にはクッバがあり、北側『二姉妹の間』と南側『アベンセラーへ族の間』の中央にある噴水もまた、小水路によりパティオ中心の噴水と結合される。これら4水路によりパティオは四分割され、「四分庭園」である「十字路パティオ」が形成される。

この「十字路パティオ」は同じアルハンブラの旧サン・フランシスコ修道院やヘネラリーフェの形式よりも、12世紀のカスティリャーホや14世紀のコルドバ新

王宮のパティオ形式に類似するし、12-14世紀に改造されたセビーリャの『インディアス通商院パティオ』や同じ14世紀のトルデシーリャス王宮のパティオを連想させる。しかし、ライオンのパティオの最大特徴は4周を取り囲む回廊、および短辺中央には池ではなく泉殿が設けられていることにあろう。全周回廊の形式は、古代のエジプト神殿から古代ギリシアやローマに代表される地中海地域のパティオ型住宅、あるいはスペイン・イスラムの世界では10世紀のコルドバの大モスクのパティオやマディナート・アル=サフラの『柱のパティオ』とか、12世紀

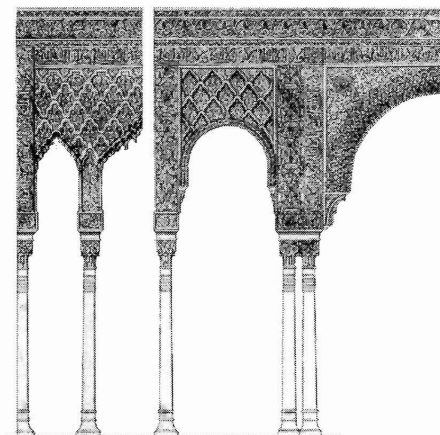


図12 ライオンのパティオ、回廊アーケード (Girault de Prangeey)

ムワッヒド朝のセビーリャ・モスクの  
パティオなどに見られ、中世キリスト  
教修道院の中庭回廊では典型的な形式  
として頻繁に見られる。特に注目に値  
するのは、同じ14世紀、ムハンマド5  
世の友人であり、キリスト教国カス  
ティーリャ王国のペドロ1世残虐王の  
関係した三つの王宮、すなわちグア  
ドラハーラ王宮パティオ、トルデシー  
リャ王宮『ベルヘルの中庭回廊』、お  
よびセビーリャ王宮のペドロ宮パティ  
オである。最初のパティオは中央に池を  
配した「十字路パティオ」、2番目が短

辺中央前に小池を配した「十字路パティオ」、そして最後が長軸に池を配した3分  
割パティオである。これら三者から、最初のパティオの中央池を噴水に、2番目の両  
サイド小池を泉殿に置換し、最後のパティオの回廊をスケールダウンして「十字路パ  
ティオ」に再構成すれば、『ライオンのパティオ』に変換されよう。また、キリスト  
教修道院では回廊に囲まれた中庭に泉殿が一般的に存在する。以上のことから、こ  
の『ライオンのパティオ』はキリスト教圏と接し、しかも造営者のムハンマド5世  
がイスラム世界に憧憬の念を抱くペドロ王と友好関係を持っていたという特殊な状  
況下で生まれたものとも  
想定できそうだ。

しかしながら、このパ  
ティオの最大特徴は124  
本の白大理石円柱にある。  
この円柱は誠に華奢で、  
その白く細長い様相は清  
純な少女を連想させる。  
円柱の直径に対する高さ  
の細長比は、ウィトル

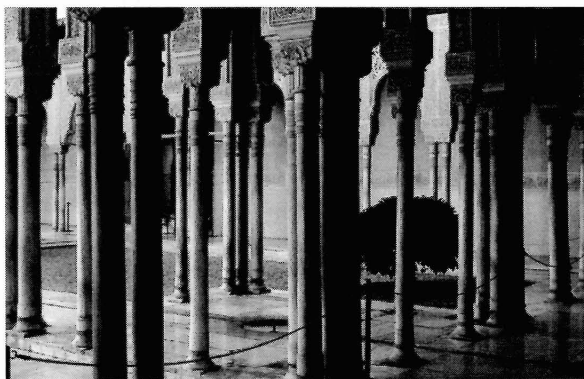


図13 ライオンのパティオ、円柱群

ウィウスによれば、男性プロポーションのドリス式で5.5倍、もしくは6.5倍、また後世には7倍、女性プロポーションのイオシア式と少女プロポーションのコリント式では8倍、もしくは8.5倍とされる<sup>11</sup>。だが、実際のギリシア神殿のドリス式になると、4.5倍程度の太さにもなる。これらに対し、『ライオンのパティオ』では12・14倍程度になり、その余りにも細身の柱身（直径約18cm）の上下には何本ものリング状のモールディングを施し、その細さをカモフラージュする<sup>12</sup>。このことに若いころのガウディは気付き、次のように記す。

「アルハンブラ宮殿の写真を検討すると、円柱は細いため、柱身にモールディングを施すことにより柱頭部を長く見せ、柱身を短くしていることが観察される。」

こうした華奢な円柱の林立する構成から、他に類例を見ないユニークさと独創性が生まれる。円柱は直線部ではソロ（単）もしくはデュエット（二重）、コーナー部ではトリオ（三重）もしくはカルテット（四重）で組み合わせられ、柱間の間隔も一定ではなく、リズムカルに変化する。また、突出する泉殿が円柱列に重層性を生み出し、円柱列で作られるスクリーンが反復しながら錯綜し、幾重にも重な



図14 ライオンのパティオ、西側の『モカラベの間』からの様相



り合う円柱の木立が空間に深みを与え、その先に光り輝く屋外のパティオ空間がのぞき見られる（図13）。また午前の朝日が差し込む時刻、隣接する『コマーレスのパティオ』から西側の『モカラベの間』に入ると、突如、黄金に輝く列柱列が目飛び込み、その列柱のスクリーン越しに『ライオンのパティオ』が見られる（図14）。背景となる反対側の回廊が日陰で暗くなっている分、手前屋内側の円柱列と繊細極まりない石膏浮彫の壁面装飾の輝きがいやがうえにも倍増される。

「十字路パティオ」が楽園の象徴とするならば、誠に天国に入ったかのような夢心地を抱かせることであろう。ヘネラリーフェの『水路のパティオ』、あるいは『黄金の間のパティオ』や『コマーレスのパティオ』などとは異なり、ここは列柱越しに見られるパティオであり、この建築装置によりパティオの景観を幾倍もの美しさで享受できるのである。

しかしながら、このパティオの当初14世紀のオリジナルの状態が判明しているわけではない。掲載されている図版でも明らかのように、十字路で4分割された4区画が植栽庭園であったのか、あるいは19世紀や今日のように、小砂利の区画であったのか。1775-76年に訪問し、1779年に出版したスウィンバーンの図版（図15）によると、パティオ全面が床石もしくは陶

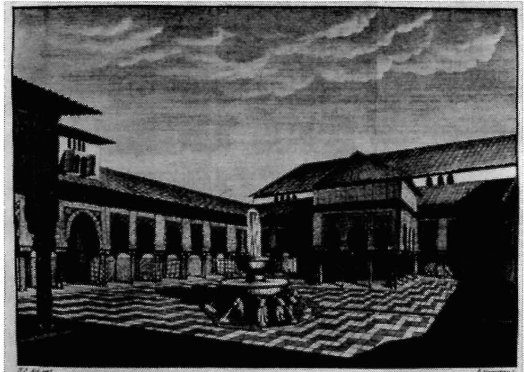


図15 ライオンのパティオ、18世紀の図版  
(Swinburne)

板で敷詰められ、植栽もなければ、小水路は短軸にのみ描かれ、十字路は形成されていない<sup>14</sup>。また、1501年にアルハンブラを訪れたアントアン・デ・ラレンは次のように記す。

「アルハンブラは大変大きい。小さな都市のようだ。内部には2つの住宅群があり、その一つは『ライオン』区と呼ばれる。そこには白大理石敷きの四角いパティオがあり、その中央の同じような大理石で舗装された泉からは水が湧き出、同材の12体のライオンの口からも泉の水がはき出される。ライオンの上には大

きな水槽があり、そこにある管を通し前記ライオンに送水される。それはうまく作られている。また、パティオには6本のオレンジがあり、それらの木陰はいつも涼しく、人々の太陽の暑さから逃れる場所となる。このパティオの周りには白大理石敷きの回廊と同材の250本の円柱がある。」<sup>15</sup>（傍点は訳者による強調）

最後の「250本の円柱」の記述からも明らかなように、ラレンもまた、このパティオの特徴を円柱と考え、その多さを、実際の124本でなく、250本と強調する。これは単なる誤りであろうが、ラレンの受けた印象が率直に顕現されているとみることができる。そしてこの記述で明らかになることは、回廊のみならず、パティオもまた白大理石で舗装されていたこと、およびその大理石パティオには6本のオレンジの樹が育っていたことだ。これはキリスト教徒に征服されてから10年目の記述であるから、イスラム時代も同様であったことが推測される。

1525年に訪問したナヴァジェロも「(コマーレスのパティオと) 同じく美しい大理石張りの」パティオ<sup>16</sup>と記し、また1600年に出版した書でマルモルも「雪花石膏で全床面敷かれたパティオ」<sup>17</sup>と記述する。雪花石膏は光を通すような大理石であり、アラバスターとしても知られる。したがって、16世紀は少なくとも大理石床張りパティオであり、この状態が1779年の図版の時代まで存続したように考えられる。しかしながら、19世紀に出版された平面図では、『ライオンのパティオ』が四分割の植栽庭園のように描かれており、タイロー (1789-1879) やロバーツ (1796-1864) の図

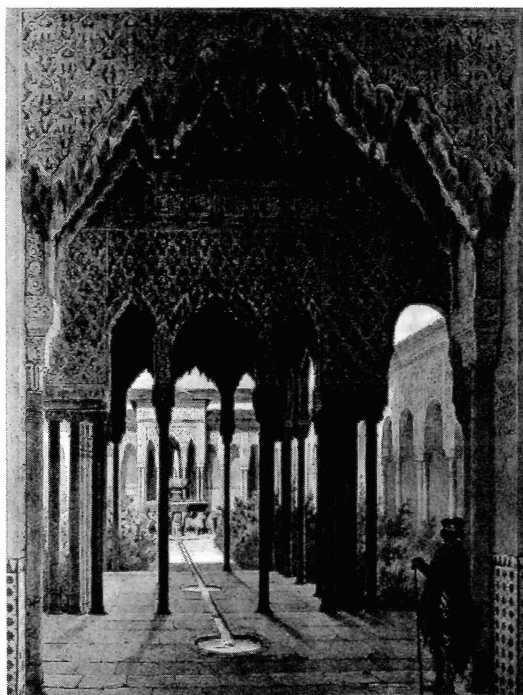


図16 ライオンのパティオ、タイロー図版  
(19世紀前半)

版（図16・17）にも繁殖する植栽庭園が出現する<sup>18</sup>。また、1832-33年に訪れたジロー・ドゥ・プランジェは「バラの木とジャスミンと銀梅花で縁取られた4つの通りはライオンの噴水に達する」と記述する<sup>19</sup>。しかしながら、1860-70年代に撮影されたロラン写真集（図10-11）では植栽は見られず、さりとて大理石敷きでもなく、現在

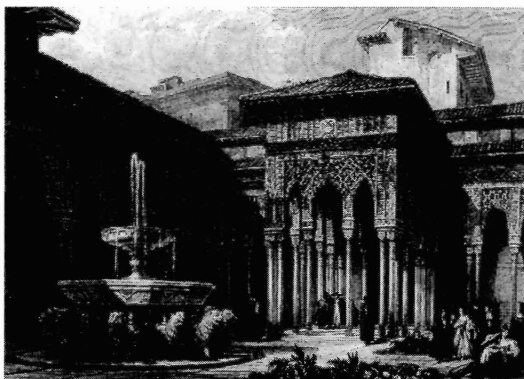


図17 ライオンのパティオ、ロバーツ図版（18世紀前半）

のような小砂利敷きか、あるいは刈り込まれた芝生であるかのようにも見える。また、1970年代には植栽庭園（図14）が復活しており、現在は小砂利敷きでコーナーの4隅には低木（図13）が植えられている。

したがって、現在のパティオからイスラム時代の様相を想定することは難しい。少なくとも、16世紀は白大理石舗装であったことから、イスラム時代も同様であったとする推測は可能である。しかし、ムハンマド5世の14世紀後半も同一であったとする根拠は全くない。特に、同時代に建設されたセビーリヤ王宮ペドロ宮の『ドンセーリヤスのパティオ』が当初3分割され、両側には落ち込んだ植栽庭園が存在したのだが、1584年には総大理石敷きのパティオに改造されていたことが判明した以上、『ライオンのパティオ』もそうであった可能性を否定できないのである。なぜなら、「十字路パティオ」では4分割の植栽庭園をもつことが伝統であったと想定できるからだ。その場合、植栽庭園部の落ち込みがセビーリヤ王宮でのように深いものであったのか、あるいはヘネラリーフェのように浅いものであったのかという問題も提起される。さらに厄介なことは、パボン・マルドナードからつぎのような推測が提出されていることだ。『ライオンのパティオ』以前の12世紀頭にすでに四分庭園が存在し、ナサリ朝の諸王はこの既存庭園を再利用し、ムハンマド5世が現在のパティオに改造したという推定である。しかも、センドーヤの発掘調査によれば、庭園の深さは80cmほどであったと言う<sup>20</sup>。残念ながら、センドーヤの発掘調査は出版されることなく、その記録の所在も判明せず、

発掘の詳細は全くわからない。したがって、80cmの深さが何を意味するのかは不明であり、これから何らかの結論に導くことは困難であろう。再度の発掘調査が強く望まれるところだが、現時点で確実なことは総大理石敷きの十字路パティオが存在したこと、そして、それは四分庭園の植栽部を持つ「十字路パティオ」の伝統に従っていることであろう。

## アルハンブラの「庭園」と「建築」

『ライオンのパティオ』の主要建築は北側回廊中央に位置する『二姉妹の間』であり、その北側中央に突出する『ダラーハの展望台』には玉座が想定されることから、『コマーレスの間』同様、「謁見の間」であったと推定される。この壁面を飾るアラビア文字による装飾銘は、アルハンブラで最も優れ、かつ最も長い詩であろうと評価されている。その作者はアル・ジャティブの弟子で、師を後継して時の大臣になったイブン・ザムラクである。全24文の冒頭の1・2文は次のように始まる。

「私は美しさで飾られた庭、その美しさを見るだけで、陛下には私の身分がおわかりになる。というのも、私の王ムハンマドのため、過去・未来を通じて最上のものに、私は匹敵しようから。」<sup>21</sup>

これに続く銘文では天井の鍾乳石ヴォールトを夜空の天に譬え、星団の輝く様子を詠い、あるいは円柱、アーチ、大理石などの美しさに触れていることから、ここを装飾する銘文は、当然のことながら、このホール『二姉妹の間』を賛美するものとなろう。したがって、冒頭の「私」とはこのホールを指し、それが「庭」だと言っていることになる。また第22文でも次のように記し、建築と「庭」とをダブらせているのだ。

「これまでに、これほど豊かな果実と芳しい香り満ちた緑豊かな庭を見たことがない。」<sup>22</sup>

ムハンマド5世の時世はグラナダ王国の最も平和な時期であり、それ故にまた、最も繁栄した時代であった。この王の時代にグラナダ芸術の最盛期を迎え、正に同王のもとで現アルハンブラの古王宮の大部分が造営された。その中心が『ライオンのパティオ』であり、そしてそのコア建築が『二姉妹の間』であった。この『二姉妹の間』が「庭」と言うのである。

このクッパ『二姉妹の間』は、他のアルハンブラの建築同様、次のような特徴を持つ。『ライオンのパティオ』側の入口を入ると、直角方向に延びる細長い空間があり、これを通過後、中央に噴水の配された正方形のクッパ、さらに前進すれば、またしても直角方向に延びた長方形の『アルヒメセス（二連アーチ窓）の間』、そして中央先端に位置する玉座の『ダラーハの展望台』に達する。この展望台は正面の入り口側を除く3壁面全体が開口されており、下に広がる『ダラーハの庭』を眺めることができる。正に庭園に浮かぶ東屋である。現在この庭園はカルロス5世により増築された諸室により閉ざされた空間になっているものの、それ以前の16世紀第1四半世紀までは、解放された庭園であり、城壁外に広がるグラナダの絶景を享受できた。すなわち、パティオという中庭から入り、そして抜けると、またしても、外庭に達し、眼下には眺望のきく絶景が眺められた。しかも、この室内空間中央には噴水があり、天井には夜空の天球が抽象化してある。このクッパ『二姉妹の間』は庭園の中の東屋であり、比喩的に言えば、十字路庭園の中央交差部に位置する東屋に相当し、その中心に噴水が存在することになる。



図18 アルハンブラ、二姉妹の間、パティオ側入口から ダラーハの展望台

最も重要な建築が庭園の中の東屋に過ぎなくなる。メインは庭で、建築はサブに過ぎない。パティオにいと屋内にいるように感じ、室内にいと屋外にいるような錯覚に陥る。しかし、すべてが庭にいると思えば、納得できることであり、酷暑の砂漠環境に育ったアラブ人イスラム教徒に遡るなら、理想の建築、理想の園と言えるのであろう。それが、緑豊かなグラナダのスペインで達成されているのである。

## 8. まとめ

スペインにおいておよそ8世紀間続いたイスラムの庭園は、これらアルハンブラの庭園をもって終わる。以降はもっぱらキリスト教徒の庭園となり、特に18世紀初頭のスペイン継承戦争以降はハプスブルク家からブルボン家に王朝が移り、フランスの影響でバロック庭園が移植され、他の芸術活動同様、庭園においてもヨーロッパ化が進行する。しかしながら、長い間イスラムの支配下にあったスペイン南部のアンダルシア地方にはパティオというイスラム文化を継承する庭園形式の伝統が根付き、この地域の特徴となって今日に伝わる。明らかにこの後者パティオの庭園形式の方がスペイン的であり、前者のバロック庭園はヨーロッパ一般の形式と言える。このことが、本稿『スペインの庭』で前者のパティオ形式の庭園を扱っている最大の理由になろう。

ルネサンスに古代ローマの復興という側面があるように、同時期の庭園も古代ローマのヴィッラ（別荘）に起源をもつと言える。これからバロック庭園に発展していくのだが、その過程でスペイン南部のイスラム庭園における水遊び装飾（池、噴水、小川、水の階段など）が影響を与えた可能性がある。その理由はグラナダがイタリア人商人、特にジェノヴァ人と密接な関係にあったこと、またイタリア南部のシチリア王国やナポリ王国がスペイン・キリスト教国の一つ、アラゴン王国の支配下にあったことなどにある。このバロック庭園の最大特徴の一つに、本館の邸宅もしくは宮殿を中央に配し、それを中心に放射状に庭園がデザインされ、展開することにある。本館は宅地の最も高い場所に位置するのが一般であり、したがって、そのテラスからパースペクティブな庭園の眺望が享受できる。これは庭園の中心に東屋があり、そこから四周の眺望を楽しむというイスラムの庭園のデザイン思想に一致するものであり、アルハンブラの各クッパ（主ホール）がこの思想の顕現であることは本稿で明らかにされたことでもある。もちろん、この思想が西欧のバロック庭園に影響を与えたというつもりはない。そうではなく、手法は一致しながらも、実現した庭園の具体像が全く相違することに注目したい。違いの本質は恐らくスケールの問題にある。バロック庭園は超スケールであるのに対し、スペイン・イスラムの庭園は人間のスケールをベースにし、決してそれから逸脱することがない。それは建築自身にも言えることであり、前者では本体建築が絶対王政の御殿であるのに対し、後者では仮の住まいで

ある東屋に過ぎない。バロックでは眺望できる広大な庭園は人工の自然であるのに対し、スペイン・イスラムでは眺望できる絶景は借景の大自然である。前者では庭園内に人が入り、散策したり、時には乗馬したりして楽しむことができるのに対し、後者のパティオ型庭園では座しての観賞を専らとし、緑と木陰、さらには香りと果実を提供する果樹があり、立っていても座っていてもその果実が取れるほど、人間スケールに対する拘りが見られ、体温を感じるような繊細さが認められる。西欧のバロック庭園に対するスペイン・イスラム庭園の諸特徴は、多くの点で日本庭園に共通することであろう。イスラムの発祥地がアラビア半島、すなわち西洋ではない東洋にあったことが、こうした共通性を生み出すのであろうか。不思議な現象ではあるが、同様の共通性が建築の世界でも認められるのである。

最後に、イスラムとの共生により生まれたスペイン庭園の系譜を整理し、本稿の結びにしたい。

最初の後ウマイヤ朝モスクであるコルドバの大モスク（8－10世紀）は、ムハンマドの家を原型としたモスクでありながら、その中庭『オレンジのパティオ』は発祥地の東方イスラムでは見られない特徴を最初から備えた。それは、名が示す通り、オレンジという果樹が植栽されていたことで、東方で一般的な石畳空間とは相違した。同じ後ウマイヤ朝が最も栄えた10世紀の造営された宮殿マディナート・アル＝サフラではペルシア起源の四分庭園が東方から移植され、後の「十字路パティオ」への基礎が準備される。メソポタミアから地中海沿岸地域に典型的なパティオ型住宅がこの宮殿でも基礎となっており、パティオを中心に宮殿が構成されている。その中で回廊型パティオの出現が見られるほか、池と植栽庭園を持つ『小池のパティオ』も出現している。これは反転合成すれば、十字路パティオに発展可能な形式であり、長方形パティオの短辺に3連アーチの開口部も見られる。後ウマイヤ朝が崩壊し、スペインのイスラム世界が弱小国に分裂する11世紀、サラゴサのアルハフェリア宮殿中央パティオには、上記『小池のパティオ』を反転合成した形式が出現する。同じく長方形の両短辺前には池が配され、その背後にアーケードの連なる前廊が見られるものの、十字路を形成していたかどうかは判明していない。

しかし、12世紀になれば、明確な十字路パティオの遺構がムルシア王イブン・アルダニスの城塞『カスティリェーホ』に見られる。また、同王が首都ムルシア

に建設した宮殿『ダル・アス＝スグラ』も同じく長方形の短辺に2つの池を持つ十字路パティオを中心コアとし、その十字路には水路が切られ、それらは中心の池で交わり、その交差部に東屋があった、と発掘調査で判明した。ここに最も典型的かつ理想的な四分庭園が出現したことになるが、まだ推測の域を出るものでないであろう。同じ12世紀から13世紀前半にかけ、ムワッヒド朝のスペイン側首都として栄えたセビーリャでは、それ以前から存在した王宮が拡張された。増築された宮殿はすべてパティオ型であり、数種類の十字路パティオも発掘されたり、復原されたりした。そのうちの『モンテリア宮』の十字路パティオは四周に小川が走り、十字路は1m下がりが、四分割された植栽庭園部はさらに50cm落ちる。名称が『十字路パティオ』という大パティオは2層構成であり、下層の長軸に細長い池が配され、上層には十字路が架けられる。2層の高低差が4.7mもあることから、このパティオは特殊な条件下で生まれたものと考えられる。同じく十字路パティオと想定できるものが同タイプで復原されている『インディアス通商院パティオ』である。この場合、十字路に細長い池が切られ、交差部の円形の池につながり、四つの植栽庭園部は2mほど下がる。もっともアルマグロの推定に従えば、ムワッヒド朝時代の同パティオは『カスティリェーホ』型の十字路パティオであり、現在復原されているようなパティオは14世紀、すなわちアルハンブラの主要部が建設されている時代のキリスト教徒による改造と考えられる。同じく12世紀末のセビーリャ王宮には、長方形の池を中央に配するだけの『石膏のパティオ』も出現する。また、ムワッヒド朝のセビーリャには長方形パティオの短辺両方に池を配し、両者を結合する細長い池で長軸を形成し、その両側に落ち込んだ植栽庭園部を持つ遺構も発掘されている。他方、ムルシアの13世紀前半には『石膏のパティオ』と同じく、長方形の長軸に長い池を配したパティオ、ただし3分割され、中央が池で両側が植栽庭園部、そして短辺にアーケードを持つ前廊形式の遺構が発掘されている。

13世紀半ばになると、グラナダ王国を除くアル・アンダルスはキリスト教徒により再征服される(コルドバ 1236、セビーリャ 1248)。再征服当初はセビーリャ王宮の『十字路パティオ』改造で見られるように純ヨーロッパのゴシック建築であったが、14世紀に入ると様相は一変する。アルフォンソ11世(1312-49)により着工されたコルドバ新王宮では『カスティリェーホ』に酷似する十字路パティ



オが出現し、同じく同王の手になると推測されるグアダラハラ王宮では十字路パティオの中央に大きな池が配され、回廊がパティオ全周を巡る構成が生まれる。同王と息子のペドロ1世残虐王(1350-69)の両王が関わったと推測されるトルデシーリャス王宮の『ベルヘルの中庭回廊』は『カスティリェーホ』型の十字路パティオであり、グアダラハラ王宮と同じく回廊が四周を取り囲む。そしてセビーリャ王宮のペドロ宮である。この『ドンセーリャスのパティオ』は当初長方形の短辺に2つの池を配するものであったが、両者を結ぶ長方形池を縦軸とする3分割パティオとなり、両側に沈んだ植栽庭園部を持ち、回廊により全周が取り囲まれる。

トルデシーリャス王宮で用語「中庭回廊」を使用した理由は、この王宮が、そ



図19 ブルゴス、王立ラス・ウエルガス修道院、中庭回廊『ラス・クラウスティーリャス』

の後、寄贈されて王立サンタ・クララ修道院になっており、修道院の場合、同じ場所が「パティオ」ではなく、「中庭回廊 claustro(クロイスター)」と呼ばれているからだ。語源的には、前者は空地を指し、後者はラテン語 claustrum(閉鎖、閉ざされた場所)に由来し、「回廊」を意味する。すなわ

ち、西洋の修道院は、スペインでは大聖堂も含めて、中庭回廊を必ず持ち、語源から言っても回廊の存在はそうした教会建築に必要不可欠な条件になる。これでも明らかのように、パティオ回廊が中庭回廊に由来する可能性は十分にあらう。例えば、12世紀創設の同じく王立ラス・ウエルガス修道院はイスラム手法を取り入れたムデハル建築のサンティアゴ祭室(13世紀)を持つことで知られる。この修道院の最古の部分に属すロマネスクの中庭回廊『ラス・クラウスティーリャス』(12世紀末)は中央に噴水を持つ十字路パティオで修復されている(図19)。また、ムデハル建築として知られる王立グアダルーペ修道院の『ムデハル』もしくは

『奇跡の』中庭回廊（1389-1405、図20）は中心に泉殿（1405）を持つ十字路パティオであり、パティオの一角にも手洗い用の泉殿を配する。この十字路パティオの中心には18世紀まで噴水が存在し、この噴水を覆うために泉殿が建設されていたのである。ムデハル建築とは、一般に、イスラム職人の手になる建築を指すことから、この泉殿はイスラム庭園での十字路パティオの中心に位置する東屋に相当しよう。また、中世のシトー会修道院で典型的に見られるように、中庭回廊には食堂が面しており、その前面のパティオ側には手洗いの泉殿が突出している。こうした泉殿付き中庭回廊がキリスト教修道院での伝統になっていった。

他方、イベリア半島に唯一残されたイスラム教徒のグラナダ王国では、長方形パティオの縦軸中央に細長の池、その両側に植栽庭園部を配し、短辺にはアーケードの前廊を持つ3分割パティオが庭園の伝統として定着した。この最高傑作が『コマーレスのパティオ』であろう。また、この3分割パティオ中央の池を水路に変え、短軸中央にも軸を持つ十字路パティオも見られる。これはグラナダ以前の十字路パティオの縦軸に水路



図20 王立グアダルルーベ修道院、ムデハル中庭回廊

を切ったものと見なすことができる。ヘネラリーフェの『水路のパティオ』に見られる形式である。そして、回廊で囲まれた十字路パティオが『ライオンのパティオ』で出現する。建設者のムハンマド5世がペドロ1世残虐王の親しい友人であること、また隣接するキリスト圏修道院に見られる多彩な泉殿付きの中庭回廊の諸例などを考慮するなら、『ライオンのパティオ』の回廊と泉殿構成、そして林立する白大理石円柱による構成は、スペイン南部において生まれるべくして生

まれたと結論できそうである。

十字路パティオの系譜はここで終わるものでない。十字路は十字架にも直結するから、キリスト教建築とも密接に関連する。前記した修道院中庭回廊が十字路パティオを形成するであろうことは、磔刑のシンボルである十字架と無関係では

あるまい。イスラムの楽園を象徴する十字路パティオは、同時に、キリスト教的楽園、すなわち天上の王国をも象徴することのできるのである。

スペインの黄金世紀、フェリーペ2世の戦勝を記念すると同時に、スペイン帝国の栄華を象徴するエル・エスコリアル修道院（1563-84）は、修道院、王宮、王廟聖堂、神学校、図書館よりなる巨大な建築複合体である。すべての平面構成が十字を基本にしていることは明らかであり、修道院の主要なる中庭回廊に当たる『福音史家パティオ』は大小の十字路パティオの組み合わせであり、大十字路の交差する中心にはクラシックの泉殿が鎮座する（図21-22）。また、アントニ・ガウディ（1852-1926）の隠れた最高傑作、後のサグラダ・ファミリア聖堂に変貌することになるタンジール計画案（1892-93、図23-24）もまた、アフリカにおけるキリスト

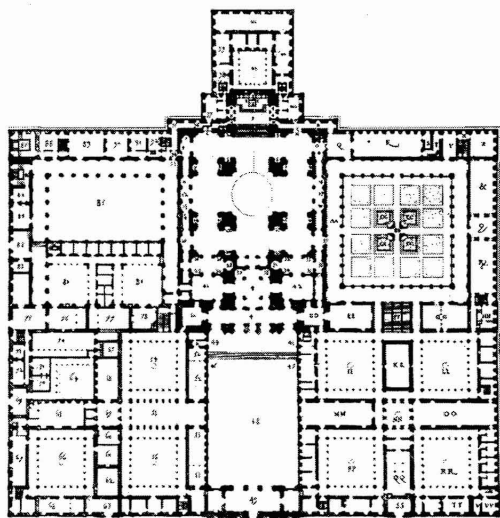


図21 フアン・デ・エレラ：エル・エスコリアル修道院、平面図、右上が『福音史家パティオ』



図22 エル・エスコリアル、福音史家パティオ

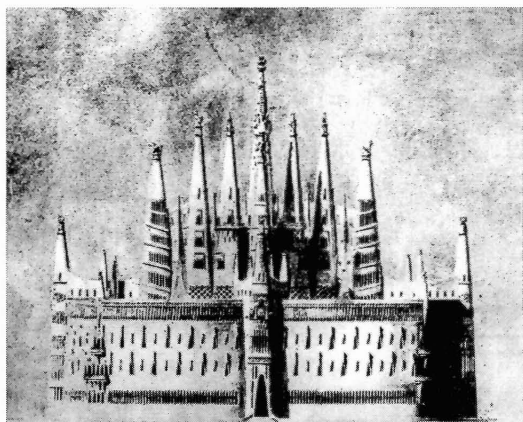


図23 ガウディ：タンジール計画案1892-93

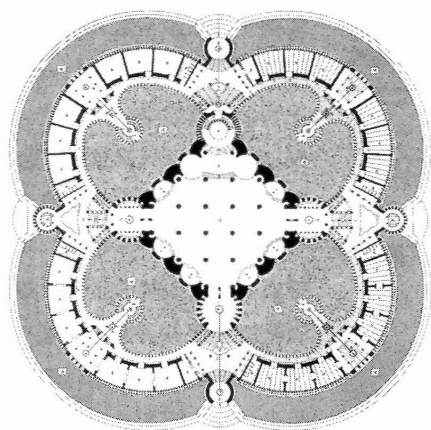


図24 ガウディ、同上計画案、平面図  
(鳥居による復元設計)

教伝道の本部機構、フランシスコ会修道院、高等教育機関、大聖堂よりなる巨大な建築複合体として計画された。この平面構成もまた、基本に十字路パティオがあり、四分割された庭園部は半円形平面の4つの独立したパティオに変換され、大十字路の交差する中心には泉殿を神の家である聖堂に置き換え、泉殿は環状棟回廊で囲まれた半円形パティオの中心に設けられている。最後のパティオ回廊と泉殿は論者の推定ではあるが、スペインが生み出した大建築家の幻のプロジェクトにおいても、ペルシアの楽園、イスラムの楽園、キリスト教の楽園でもある天上の『神の王国』(神の家)の伝統的な背景が潜んでいるのである。

(完)

- 
- 1 拙稿『スペインの庭 (1)』および『同 (3)』は『麒麟』(神奈川大学経営学部十七世紀文学研究会)、第18号(2009年3月、108(13)－88(33)頁)と第19号(2010年3月、68－90頁)、『同 (2)』は『国際経営フォーラム』(神奈川大学国際経営研究所)、No.19(2009年7月31日)、pp.215--43頁に掲載される。

- 2 Machuca, Pedro: “Plano parcial de la Alhambra de Granada, con la Alcazaba, la Casa Real Vieja y el Palacio de Carlos V” (629 x 1300 mm), マドリード王宮図書館 Real Biblioteca de Madrid (CD/51 F1. 55-F2. 9). この図面には日付の記述がなく、制作年は早いもので1527年、遅い推定で1542年とされている。
- 3 Torres Balbás, Leopoldo: “Proyecto de Reparación de las habitaciones de los Gobernadores” (Granada 18 Abril 1929)、この計画案添付図面による。Archivo General de la Administración (Alcalá de Henares) 所蔵
- 4 Contreras, Rafael: *Estudio descriptivo de los monumentos árabes de Granada, Sevilla y Córdoba* (ただし、内表紙のタイトルは以下のように異なる: *Del arte árabe en España manifestado en Granada, Sevilla y Córdoba por los tres monumentos principales, la Alhambra, el Alcázar y la gran Mezquita — Apuntes arqueológicos*), Granada: Indalecio Ventura, 1875, p.259
- 5 パティオの平面規模はトーレス・バルバス (Torres Balbás, Leopoldo: *La Alhambra y el Generalife (Los monumentos cardinales de España VII)*, Madrid: Editorial Plus-Ultra, 1953, p.63) による。ただし、オリウエラによる最近の調査では不整形な長方形で北辺23.40、南辺23.00、東辺37.10、西辺36.30m、面積851 m<sup>2</sup> (Orihuela Uzal, Antonio: *Casas y palacios nazaríes siglos XIII-XV*, Barcelona: Lunweg, 1996, p.84) である。また、同じオリウエラ作成の図面による池の規模が約34.50×7.20×深さ1.30 m (同前書, Orihuela Uzal-1996, pp.83, 94) に対し、19世紀のラフエンテは124×27×深さ5ピエと記述する (Lafuente Alcántara, Miguel: *Historia de Granada* (復刻版), Granada: Universidad de Granada, 1992 (初版-1845), Tomo III, p.144)。ピエはフィートに相当する単位だが、スペインのピエは約28cmになるから、池の規模は約34.72×7.56×1.4mと計算される。
- 6 Torres Balbás, Leopoldo: *La Alhambra y el Generalife (Los monumentos cardinales de España VII)*, Madrid: Editorial Plus-Ultra, 1953, p.65
- Andrés Navagero: “Viaje por España”, en García Mercadal, J.: *Viajes de extranjeros por España y Portugal, desde los tiempos más remotos, hasta fines del siglo XVI* (Recopilación, traducción, prólogo y notas por ----), Madrid: Aguilar,

1952, Tomo I, p.854

- 7 この高さ関係の寸法はトーレス・バルバスの図面 “Proyecto de Reparación de la galería sur del Patio de la Alberca en la Alhambra, 6-III-1926” (Archivo General de la Administración, Alcalá de Henares 所蔵) に基づく。
- 8 Pavón Maldonado, Basilio: *Estudios sobre la Alhambra*, Granada: Patronato de la Alhambra, 1975, vol.I, pp.67-68
- 9 Gómez Moreno y Martínez, M.: *Guía de Granada*, Granada: Universidad de Granada, 1998 (復刻版, 1892年初版), Tomo I, pp.45-57  
Fernández-Puertas, Antonio: *Historia de España de Menéndez Pidal VIII-4, El Reino Nazarí de Granada (1232-1492), Sociedad, vida y cultura*, Madrid: Espasa-Calpe, 2000 pp.242-44
- 10 Ibn al-Jatib: *Nufādat al-ŷirāb fi 'ulālat al-igtirāb, o sea Sacudida de alforjas para entretener el exilio*, “Nufāda-III” (ラバット手稿), 182-83, 403-23葉  
García Gómez, Emilio: *Foco de antigua luz sobre la Alhambra: Desde un texto de Ibn al-Jatib en 1362*, Madrid: Instituto Egipcio de Estudios Islámicos, 1988, pp.146-47, 236-37,
- 11 Vitruvio, Narco Lucio: *Los diez libros de arquitectura*, Barcelona: Iberia, 1970, pp.86-90, 93-94 / 『ウィトルーウィウス建築書』(森田慶一訳註)、東海大学出版会、1989(初版), pp.89-93, 96-100. 直訳タイトルは『建築十書』であり、その第四書第一章と第三章にプロポーションの記述が見られ、本文で述べたように、数字にばらつきが見られる。
- 12 Lafuente Alcántara, Miguel: *Historia de Granada* (復刻版), Granada: Universidad de Granada, 1992 (初版,1845)、Tomo III, p.149-60. 円柱の高さ 10ft×直径8.5in、これに従うと、約12倍の比率になる。しかし、以下の縮尺 1/50 の図面を実測してみると12倍から14倍程度と推測される。Torres Balbás, Leopoldo: “Alhambra / Proyecto de Reparación de las galerías del Patio de los Leones , 30-IX-1926” (Archivo General de la Administración, Alcalá de Henares 所蔵)
- 13 Gaudí, Antoni: *Apuntes de Reus* (レウス市立博物館所蔵の手稿), Barcelona, 1878- 79, 冒頭部 (第5葉表) / 『建築家ガウディ全語録』(鳥居徳敏編・訳・注

解), 中央公論美術出版, 2007, p.193

14 Swinburne, Henry: *Travels through Spain, in the Years 1775 and 1776*, London: P. Elmsly, 1779, p.178 bis, 図版 “Court of the Lions in the Alhambra or Moorish Place of Granada”

15 Antonio de Lalaing, señor de Montigny (1480-1540): “Primer viaje de Felipe el Hermoso a España en 1501”, 注6の書, García-1952, Tomo I, pp.474-77

16 Andrés Navagero: “Viaje por España”, 注6の書, García-1952, Tomo I, pp.854-57

17 Mármol Carvajal, Luis del: *Historia del Rebelión y castigo de los moriscos del reino de Granada*, Málaga, 1600 (Real Academia de la Historia, 1797)/ Biblioteca de Autores, *Historiadores de sucesos particulares* (Vol.XXI, pp.123-365)/ Málaga: Editorial Arguval, 2004, pp.38-39

18 Murphy, James Cavanah: *The arabian antiquities of Spain*, London ; Cadell & Davies, 1813, Pl.XII “Graund Plan of the Alhambra”

Taylor, Isidore-Justin-Séverin, Barón: *Voyage pittoresque en Espagne, en Portugal et sur la cate d'Afrique de Tanger a Tétonan*, Paris: Librairie de Gide Fils (Typographie Plon Feères), 1832, Pl.96 “Cour des Lions, Alhambra”

Goury, Jules, and Jones, Owen: *Plans, elevations, sections, and details of the Alhambra*, London: Vizete lly brothers, 1842, Plate III “Plan de la Casa Real árabe, en la Fortaleza de la Alhambra”

Roscoe, Thomas: *The tourist in Spain - Granada, illustrated from drawings by David Roberts*, London: Robert Jennings, 1835, p.245bis “Court of the Lions”

19 Girault de Prangey: *Souvenirs de Grenade et de l'Alhambra par Girault de Prangey. Lithographies dessinés d'après ses tableaux, plans et dessins faits sur les lieux en 1832 et en 1833*, Paris: Veith et Hauser, 1837 / (西語復刻版) *Granada y la Alhambra, monumentos árabes y moriscos de Córdoba, Sevilla y Granada - Recuerdos de Garanada y de la Alhambra por Giralt de Prangey. París 1837*, Barcelona: Escudo de Oro, 1982

20 Pavón Maldonado, Basilio: *Tratado de arquitectura hispanomusulmana—III.*

*Palacios*, Madrid; CSIC, 2004, pp.500-07

- 21 García Gómez, Emilio: *Ibn Zamrak, el poeta de la Alhambra*, Madrid; Real Academia de S. Fernando, 1943, pp.134-36 / *Poemas árabes en los muros y fuentes de la Alhambra*, Madrid; Instituto Egipcio de Estudios Islámicos, 1996 (初版1985), pp.115-19

Santiago, Emilio de: *La voz de la Alhambra - Guía para escuchar los poemas alhambrenos*, Granada; La Biblioteca de La Alhambra, 2009, pp.105-07

- 22 同上注参照